



コレラ騒ぎに思う

環境事業局 村田 章

当時かなり大きく取扱われた出来事だからまだ記憶にある人もいると思うが、昭和五十三年の春に鶴見川からコレラ菌が検出され大騒ぎになったことがあった。その前年に和歌山県有田市でコレラが発生し町全体がパニックに陥るといふ事件があったからなおさらだったのかも知れないが、菌検出はマスコミに より大きく報じられ少なからぬ混乱が市にもたらされた。

にマスコミの扱いはずいぶん と冷静なものとなってきたし、人々の対応のしかたも沈着にな っている。

窓口業務に携わって

旭区役所 中路 聡

同じコレラ菌の検出というこ とでありながら、なぜこうも社 会の受けとめ方が違ってくるの だろう。岩川隆という人が書いた「コレラ戦記」というルポを 読むと、正確な知識のないまま にただ「コレラ怖い」の一念で 行動する人々のパニックのよう な様子がよくわかる。鶴見川事 件のときも、当時私はその仕事 にかかわったのだが、恐怖感に も似た雰囲気すら感じられた。

な、と考えさせられる。 昨今、自治体や自治体職員に 対し、ヤミ給与問題などさまざ まな批判が相次いでいる。われ われとしては、それらの一々に 謙虚に耳を傾け、正すべきこと ろは正し、言うべきことがあれ ば臆することなく反論を明らかに すべきであらう。

久しく現われなかったコレラ 菌が検出されたのだから、人々 が緊張したのも無理からぬ点があ ったし、行政が菌の絶滅を期 して防疫活動するのも当然のこと だろう。だがそれには冷静さ と正確な認識が必要だ。当時の マスコミや人々の示した反応 は、これまでにない何か恐しげ な現実と直面したときに日本社 会が示す過度の反応の典型のよ うに思える。社会が現実をあり のままに受けとめるには、それ なるの経験と時間が必要なのか

このような市民の自治体への 関心の高まりに対し、これを消 極的に受けとめるだけでなく、 積極的な受けとめ方がないだろ うか。即ち、市民と自治体をよ り強く結びつける、あるいはわ れわれ自治体職員とその仕事に 対する理解を深めてもらう機会 であり、かつまたわれわれ自身 が自らの仕事を改めて考え直し てみる契機とするのである。

その事件からすでに二年半以 上もたったが、その間、市の河 川からコレラ菌が検出されたとい う報道は一度ならずあったの

この仕事は市民生活にどう結 びつき、どのように役立っている る、もしくは役立たねばならな いか、一見分かり切っている ようなことだから考え直すこと で、日頃見過ごしていたことが

発見できるかも知れない。仕事 のやり方に不合理や無駄はない か、やらねばならぬことを落と していないか等々。それは他の 職務とのつながり等を通し、機 構、予算など包括的な問題にひ ろがるであらうし、他方では、 自治体職員としてのあり方をも 問うことになる。既成の考え 方を借りてくるのではなく自分の 仕事に立脚していくことは決し て無駄にはならないだろう。

また、われわれの仕事に対し、 市民の理解を得るように努める ことも常に心がけねばならな い。広報紙等のPRだけでは広 範な市行政全般をカバーするに はおのずから限界がある。個々 の職場の窓口、あるいは電話等 での市民との応対がより直接的 かつ基本的なものとなる。そこ で大切なことは、できること とできないことをはっきりさせ、できないときはその理由を 明確にすることである。時には われわれの不十分な点、力の足 りない点を明らかにする勇氣も 必要とする。

市民参加といい、開かれた行 政といっても、それはわれわれ

がわれわれ自身の仕事を正しく 位置付け、かつそれを市民に明 らかにしうるようになってはじ めて成り立つことであり、その 意味でまだまだ不十分な点、な さねばならぬ点があるのでな いだらうか。

〈あとがき〉

今回は「疾病以前」というこ とで健康を考えてみた。役所でも昼休みにジョキングをしてい る人をよく見かける。健康はま ず第一におのれ自身に責任があ ることは当然ながら、それでも 行政がすべきことは種々あるだ ろう、という観点から編集した が、問口の広さに苦しんだ。 いろいろ話しをきき、病気になる 前の観点ではまだ行政は整理 されていないと感じた。(富永)

『調査季報』は職員が自由 に意見を発表し討論する行 政研究誌です。「行政研究」 への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市 科学研究室まで(電話六七 一—二〇二九)。

この「読者のページ」へ もご投稿ください。市政、 都市問題、自治体問題等、題 材は自由。七〇〇字以内。